

山の百名花

遠足員 村田 浩子

【79】ノリウツギ

ひとところ夏になるとよく出かけていた霧ヶ峰に何年ぶりかで行ってみた。ニッコウキスゲが草原を埋めつくし、低木のノリウツギが白い花をつけはじめていた。

私が霧ヶ峰で名前を覚えた花は多いが、ノリウツギもその一つである。ムシカリに似てガクアジサイのような装飾花をつけるが、ノリウツギの装飾花はムシカリのような純白ではなく、ややクリーム色を帯びているせいだ、少し地味な感じがする。そして何よりムシカリが春の花であるのに対し、ノリウツギは夏の花である。

ノリウツギの名は、この木の内皮から粘液を取り出し、和紙を漉くときの糊として使ったことからきているという。

作家大江健三郎氏の生家は愛媛県で紙の原料を大蔵省に納める仕事をされていたが、氏は少年の頃、山に入って花をつけたノリウツギの木に印を付ける手伝いをしていたので、ノリウツギの花だけは今でも見ればすぐにわかると書いておられる。

ノリウツギは別名サビタとも呼ばれる。伊藤久男の「サビタの花」という歌謡曲があるというが、私はまだ聞いたことがない。

この木は北海道にも多いとのことだ、サビタはアイヌ語ではないかという気もする。いずれにせよ、ノリウツギは私にとって夏の訪れを感じさせてくれる花である。



【80】イブキトラノオ

イブキトラノオも私が霧ヶ峰で初めて名前を覚えた花である。

淡紅色の小花が寄り集まって円柱状の穂



になるこの花が私は好きだが、個体数が多いので平凡に思われてしまうのか、この花を好きだという人にはあまり会わない。

穂状に咲く花の形を虎の尻尾に見立ててトラノオと名づけられた植物は多いが、細い穂先が風になびくような流線型のオカトラノオなどに比べると、イブキトラノオは尻尾の先がブツンと断ち切れたようで、少しぶつきらぼうな感じがする。

またルリトラノオやヒメトラノオの濃い青紫色と比べると、白に近いピンクの花穂は時に色あせたようにも見え、あまり人目を引かない。

しかし今年、草原の中で夏の青空に向かって一面に穂を立てているイブキトラノオに出会ったとき、いかにも明るくさわやかな印象で、あらためていい花だと思った。

そして三、四年前の六月に泊まった礼文の宿で、桃岩のお花畑にイブキトラノオが咲いていたと言った泊まり客に対して、「礼文も、もう夏だなあ」と言ったご主人の一言が思いだされた。

まさにイブキトラノオもまた夏の訪れを告げる花の一つである。